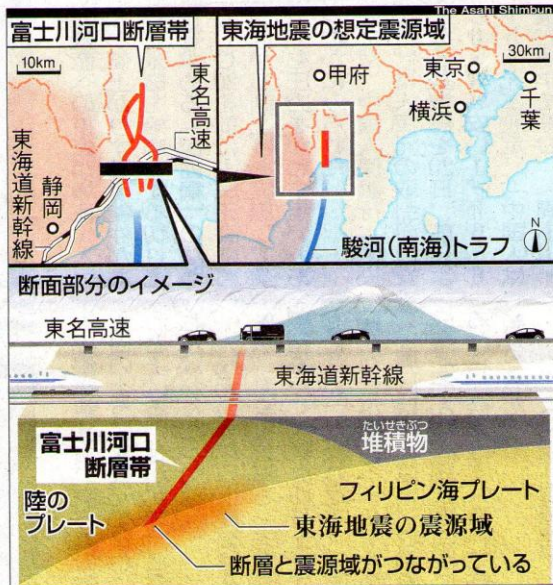


新幹線・高速

東海地震で分断の恐れ

政府地震本部 地表に段差数メートルか



東海地震が起きたとき、静岡県東部にある富士川河口断層帯が連動して地震を起こす場合があるとの見解を、政府の地震調査研究推進本部（地震本部）が20日、発表した。同断層帯で地震が起きると地表に数分の段差がでるとみられる。断層帯は東海道新幹線や東名高速の直下で、本州の動

脈が分断される恐れがある。地震本部によると、断層帯は、長さ26キロ。東海地震を起こすプレート（岩板）境界が海底に現れた駿河（南海）トラフと隣接するため、連動して地震を起こすかどうか議論されていた。同断層帯による地震は1500～1900年に1回しか起きず、百数十年に1回の東海地震と比べて間隔が長いことなどから、別々に地震を起こすとみられていた。

しかし最近の調査で断層帯でも1500～3000年に1回、地震が起きていた可能性が判明。規模も同断層帯の大きさから考えられるものより大きかった。地震本部は、断層帯は地下で東海地震の震源域とつながり、連動して地震を起こすと結論づけた。

地震本部によると、東海地震が今後30年以内に起こる確率は87%。断層帯が連動して起こる地震の発生確率は最大で18%としている。連動しても地震規模はマグニチュード（M）8前後で変わらないが、地表には上下1～2分、場合によっては10分の段差ができるという。段差は、断層帯の上を走る東名高速と新幹線を分断する恐れがある。交通被害の影響を抑えるには、事前に迂回路などの検討が必要だ。東海地震予知をめざす判定学会長の阿部勝征東京大名誉教授は「地形の変異という新たな想定被害が加わる恐れが高まった。道路などは早期復旧の策を練ることがより重要」と指摘する。（長野剛）

阪神や中越教訓

対策進め復旧へ

東北新幹線

東北新幹線が4月下旬までに全線で復旧の見込みになった。架線の切断や電柱の傾き、高架橋のひび割れなど、被害は大宮(さいたま市)ーいわて沼宮内(岩手県岩手町)の区間(路線延長496・2キロ)で計約1200カ所に及んだ。それでも早期復旧にこぎ着けたのは、過去の地震被害を教訓に対策を進めてきたからだ。

1995年の阪神大震災では、山陽新幹線で高架橋や橋柱の鉄筋コンクリートが崩れる「せん断破壊」が発生、8カ所で橋げたが崩落した。全面復旧に8日もかかった。2004年の新潟県中越地震では上越新幹線「こき3256号」が脱線し復旧に66日を費やした。

JR東は阪神大震災を教訓に、07年度から新幹線高架橋の柱に鉄板を巻く補強工事を始めた。中越地震を受けて工事のペースを早め、07年度までに対象となる約1万8500本すべてで工事を終えた。今回、せん断破壊は起きず、橋や高架橋、トンネルの崩落もなかった。同社は「早期復旧が可能になったのは、ゼロ

から作り直さなければならぬ致命傷がなかったことが大きい」と話す。

人的被害もなかった。11日の地震発生時、東北新幹線は24本が営業運転中だったが、太平洋の海岸沿いに9カ所、さらに沿線44カ所にも設置した地震計が初期微動を検知。自動停車を受けて非常ブレーキが作動し、全列車とも脱線せずに停車した。人がはなかつた。中越地震以後、JR東は地震計を新幹線の沿線28カ所増設し、非常ブレーキが作動するまでの時間を短縮するシステム改良もした。

中越地震の脱線事故の教訓から、JR東は脱線防止用に車軸に逆し字形の鋼鉄製ガイドを全ての新幹線車両に設置。今回、仙台駅へ向かっていた試運転列車1本が緊急停車時に脱線したが、このガイドがレールに引っかかり、横転は免れた。

JR東は、管内の復旧工事にかかわる約8千人のうち、約3500人を新幹線の復旧に充てている。担当者は一中越地震の時、新編の人たちから「新幹線の復旧は被災地に元気をくれる」と言われた。

東北新幹線の全線開通を復旧の一步にした、「と話した。」(宮崎加菜子)